



喜多院 ～江戸の面影を残す文化財の宝庫～ (重要文化財)

<http://www.kawagoe.com/kitain/>



喜多院は、五百羅漢やダルマ市(1月3日)で知られています。

天長7年(830年)に慈覚大師が無量寿寺を開いたのが始まりと伝えられています。

永仁4年(1296年)、尊海が慈恵大師を勧請して无量寿寺を再興し、北院・中院・南院となる各房が建てられました。

喜多院となったのは慶長17年(1612年)、徳川家康の信任を得る天海僧正が、住職となってからのことです。



寛永15年(1638年)、大火によって喜多院のほとんどを焼失。3代將軍家光が江戸城内・紅葉山から客殿、書院などを移築しました。

それが結果的には江戸の大火による焼失を免れることになり、江戸城唯一の遺構として残されることになりました。

客殿や書院には「家光誕生の間」「春日局化粧の間」と伝えられている部屋があります。

これらは、慈眼堂・山門などとともに重要文化財に指定されています。



拝観時間

3月1日から11月23日 平日：午前8時50分から午後4時30分まで

日曜日：午前8時50分から午後4時50分まで

11月24日から2月末日 平日：午前8時50分から午後4時まで

日曜日：午前8時50分から午後4時20分まで

拝観料金 大人400円・小人200円

喜多院所縁の人物

千二百年近くの長い歴史の中で、特に喜多院と深く所縁のある方です。

- ・天海大僧正
- ・徳川家康
- ・徳川家光
- ・春日局

天海大僧正

<http://www.kawagoe.com/kitain/history-culturalasset/person/tenkai.html>

天海大僧正 てんかいだいそうじょう 1536～1643（天文5年～寛永20年）

tenkai.jpg 喜多院第27世住職。慈眼大師。会津に生まれ、比叡山・園城寺などで修行した。関ヶ原の戦い後、徳川家康の帰依を受け、幕府の宗教行政に参画した。

徳川家康公の絶大な信頼を得、顧問的な存在として知られます。以後、秀忠公、家光公に仕えました。

慶長17年（1612）、天海の進言により家康公は無量寿寺再興を認め、喜多院を関東天台宗の本山と定めて天海の在住を招請しました。これを受け、以後、関東の天台宗寺院はすべて喜多院・天海のもとに属することとなりました。

108歳まで生きた天海大僧正が残した「気は長く 勤めは堅く 色うすく 食細くして ころろ広かれ」という言葉は養生訓としてつとに有名です。

寛永20年（1643）10月2日、東叡山寛永寺にて入寂され、それから5年後、朝廷から「慈眼大師」の諡号を賜い、朝廷から賜る大師号としては史上最後、日本で7番目の大師様となりました。

春日局

春日局 かすがのつぼね 1579～1643（天正7年～寛永20年）

三代将軍徳川家光公の乳母。名はお福。大奥に入り、家光公の乳母となった。家光公・家忠公の継承者争いの際、大御所徳川家康公へ直訴し、家光公が三代将軍に。大奥の制度をつくり、統率した。

1638（寛永15年）の川越大火により、山門を残し、喜多院はほぼ全焼します。徳川家光公は、時を経ずして喜多院の再建に着手しましたが、その際に客殿・書院及び庫裏は、江戸城紅葉山の御殿を解体して喜多院に移築しました。喜多院の書院に「春日局化粧の間」があるのはそのためです。



慈恵堂

県指定有形文化財

慈恵堂は、比叡山延暦寺第 18 代座主の慈恵大師良源(元三大師)をまつる堂宇です。大師堂として親しまれ、潮音殿とも呼びます。桁行(たけゆき)9 間、梁間(はりま)6 間、入母屋造りで銅版葺。現在、喜多院の本堂として機能し、中央に慈恵大師、左右に不動明王をお祀りし、毎日不動護摩供を厳修しています。川越大火の翌年、寛永 16 年(1639)10 月に大火以後、いち早く再建され、近世初期の天台宗本堂の遺構として貴重なものです。昭和 46 年度から 4 年間にわたり解体修理が行われました。天井に描かれた数々の家紋は、その際に寄進をされた壇信徒のものです。

なお、堂内には正安 2 年(1300)に造られた銅鐘(国指定重要文化財)があり、年に一度だけ除夜の鐘として、世界平和とすべての人々の安泰を願い撞かれています。

多宝塔

県指定有形文化財

多宝塔は、寛永 16 年(1639)に、山門と日枝神社の間にあった古墳の上に建立されました。その後、老朽化が進んだため、明治 43 年(1910)に慈恵堂と庫裏玄関との渡り廊下中央部分に移築されました。ただし、移築に際し大幅に改造されていたので、昭和 48 年(1973)に現在地に移し解体修理を実施し復元しました。総高 13m、方三間の多宝塔で本瓦葺、上層は方形、上層は円形、その上に宝形造りの屋根がのります。江戸時代初期の多宝塔の特徴が表れています。



客殿(徳川家光公 誕生の間)

国指定重要文化財

客殿は、書院、庫裏とあわせ江戸城紅葉山(皇居)の別殿を移築したものです。桁行(けたゆき)8間、梁間(はりま)5間の入母屋作りで柿葺(こけらぶき)。12畳半2室、17畳半2室、10畳2室があります。12畳半のうち一室が上段の間で、床と違い棚が設けられ、その襖(ふすま)と壁面には墨絵の山水が描かれています。また、天井には彩色による81枚の花模様があります。湯殿と厠(便所)も設けられています。この上段の間は、この建物が江戸城にあった頃、3代将軍徳川家光公がここで生まれたということから、「徳川家光公誕生の間」と呼ばれています。中央の17畳半の一室には仏間が設けられ、仏事を営めるように設営されています。仏間正面の壁には、豪華な鳳凰と桐の壁画があります。



書院(春日局化粧の間)

国指定重要文化財

客殿につながる書院は、桁行(けたゆき)6間、梁間(はりま)5間の寄棟作り、柿葺(こけらぶき)です。客殿、庫裏と同じく江戸城紅葉山(皇居)の別殿を移築したものです。8畳2室、12畳2室があり、一部に中2階があります。この8畳間の2室には、それぞれの床の間が用意され、片方の部屋には脇床も設けられています。これらの部屋は、この建物が江戸城にあった頃、徳川家光公の乳母として知られる春日局が使用していた部屋で、「春日局化粧の間」と呼ばれています。

五百羅漢

川越の観光名所の中でも、ことのほか人気の高い喜多院の五百羅漢。日本三大羅漢の一つに数えられます。この五百余りの羅漢さまは、川越北田島の志誠(しじょう)の発願により、天明2年(1782)から文政8年(1825)の約50年間にわたり建立されたものです。

十大弟子、十六羅漢を含め、533体のほか、中央高座の大仏に釈迦如来、脇侍の文殊・普賢の両菩薩、左右高座の阿弥陀如来、地藏菩薩を合わせ、全部で538体が鎮座しています。

笑うのあり、泣いたのあり、怒ったのあり、ヒソヒソ話をするものあり、本当にさまざまな表情をした羅漢様がおられます。そして、いろいろな仏具、日用品を持っていたり、動物を従えていたり、観察しだしたらいつまで見ても飽きないくらい、変化に富んでいます。

また、深夜こっそりと羅漢さまの頭をなでると、一つだけ必ず温かいものがあり、それは亡くなった親の顔に似ているのだという言い伝えも残っています。

鐘楼門 国指定重要文化財

2階建ての階上に梵鐘(ぼんしょう)を吊るすこの鐘楼門は、桁行(たけゆき)3間、梁間(はりま)2間、入母屋造りで本瓦葺。1階には袴腰(はかまごし)と呼ばれる囲いが付き、2階の前面には竜、背面には鷹の彫刻があります。

建立年代ははっきりとしていませんが、寛永10年(1633)に東照宮の門として鐘楼門が建立されたことが「星野山御建立記」の記録にみえます。その頃、東照宮は今の慈眼堂の場所にあり、鐘楼門再建の記録もないことから寛永15年(1638)の川越大火で焼失を免れた可能性もあるといわれています。

なお、階上の銅鐘は元禄15年(1702)の銘があります。(国認定重要美術品)



小江戸川越七福神 大黒天

当院には、小江戸川越七福神の大黒天が祀られております。

大黒天は古代インドの闇黒の神で、仏教での戦闘神です。平安以後食を司る台所の神と崇められました。又、日本の神大国主命を大國と混同させ、命の御神徳を合わせ、糧食財宝が授かる神として信仰を得ました。くろ(黒)くなってまめ(魔滅)に働いて大黒天を拝むと大福利益が得られます。

